

# *Les Justes* について

——愛と正義の問題を中心として——

神 垣 享 介

## 序

殺人を考察していく場合、単に文学作品にのみその領域を限ってみても非常に多くの殺人に出くわすことは注目されても良いことだろう。そして、その殺人という行為には常にそれぞれに特有な動機、要因が内在していることも、一見して明瞭な事実であろう。ハムレットの復讐による、マクベスの王位篡奪による、ラスコーリニコフの哲学的帰結による、さらには『法王庁の抜け穴』におけるラフカジオの内在する動機の欠如した無償の行為による殺人と枚挙にいとまがない。殺人はカインの<sup>・</sup>アベル殺しに端を発して、人間がこの世に生を受けて以来決して絶えることのなかった人間特有の営みの一つであったと言えるであろう。ところで、その殺人も時代が経るとともに、その原因となる動機も様々に変化してきたと思われる。そうした殺人の発展—もしそう呼ぶことが出来るなら—の一翼を担ったのは政治だったと言っても過言ではあるまい。政治が持つ特徴的な殺人の一つに、暗殺もしくはテロルがあげられるであろう。テロルには為政者の側からなされる白色テロルもあれば、反抗者もしくは革命家の側からなされる赤色テロルもある。以下で論じようとする *Les Justes* はまさにこの赤色テロルを生きる人々を登場人物とする戯曲である。たとえテロルといえども、そしていかなる動機があろうとも殺人は殺人である。一般概念からすれば、人間が人間の生命を奪うことは罪あることであり、悪とみなされている。しかしながら Camus は一群のテロリストたちに正義の<sup>・</sup>人々<sup>・</sup>という称号を与えている。こうした逆説的な題名を Camus が用いたことは重要

なことと思われる。だからこそ、そこから Camus の抱く正義という観念を解明する手掛かりが得られるのではあるまいか。したがって以下で論じようとするのは、主人公たちの抱く正義の意味と、その正義の実行に付随して生じる愛の問題である。

### 1. Kaliayev の斬新さについて

*Les Justes* (1949)のプロットは周知のように、ロシアに19世紀後半から20世紀初頭にかけて存在した社会革命党の指導者であり、その社会革命党から表面的には独立して組織されていた＜戦闘団＞というテロリストの組織の指導者でもあったボリス・サヴィンコフの『テロリスト群像』の中に記されている或るエピソードを基にして創られたものである。この戯曲に登場する人物たちは、サヴィンコフ同様のロシア帝政末期の20世紀初頭に生きた人々である。その時代は赤色テロルと白色テロルが交互に繰り返されていた非常に混乱した時代であった。そして *Les Justes* の登場人物たちもテロルを指向する社会革命党の＜戦闘団＞に属する人々である。

サヴィンコフがロープシンの筆名で書いた『蒼ざめた馬』の主人公であり、テロリストであるジョージは殺人について次のように自問する、「いかなるものの名においてわたしは殺人をおこなっているのか？ テロの名においてか、革命のためか？<sup>1)</sup>」。こうした問いは当然生じてくるものであろうし、非常に政治的な行為であるテロルにとって、何のためか？ という問いはテロルを成立させるにいたる根源的なものであると言えよう。そうした問いに対して *Les Justes* の主人公 Kaliayev は明確に《au nom du peuple russe》<sup>2)</sup> と答える。しかしながら au nom du peuple russe という理論の中には過去何回となく繰り返されてきた陳腐な響きが存在している

1) ロープシン著：『蒼ざめた馬』 川崎泱訳 現代思潮社 p. 19.

2) Albert Camus : *Les Justes* (Bibliothèque de la Pléiade, Théâtre, Récits, Nouvelles. Gallimard, 1974. 以下 Pléiade, T, R, N. と略す). p. 320.

ことも否めない。というのも、le peuple russe を Dieu, Roi, Etat という言葉に置き換えるだけで十分であるからである。神，王，国家の名においていったいどれ程の殺人が犯され，又正当化されてきたかを思い起こせば十分であろう。こうした人民，神，王，国家という言葉によって極度に抽象化された対象は，ただ単に言葉の上においてのみ処理されてしまう危険性を孕んでいる。言葉の上でのみ，精神の中でのみなされる形而上的試みの中にはとどまるところを知らぬ飛躍がある，と言っても差し支えなからう。ところで Kaliayev の持つ理論が衝撃的であると思われるのは，たとえロシア人民の名においてテロルを犯しても殺す相手をも一つの生とみなすことである。人間の生が等価値性を持つものとなれば—実際彼はそう信じていたのだが—人民の生を守るために，政治家の生を消滅させることは矛盾するものとなる。そこで問題となってくるのは，人間を殺すことはできない，しかし他の人間たちを殺させないためには殺せねばならない，ということである。彼がそうした苦悩の中で見出したことは《Ce n'est pas lui (le grand duc) que je tue. Je tue le despotisme》<sup>3)</sup>ということであるが，この言葉だけを祖上にのせるならば，上述したように形而上的飛躍を推し進めただけで，特に目新しいものは何一つない。しかし彼が目すべき斬新さを提示するのは，その形而上的飛躍の，その過程にあると言える。では，それが一体どのようなものかと言えば，彼の飛躍は一人の人間を専制政治に置き換えて事足りりとするような飛躍ではなく，一人の人間を殺してしまうという肉体を伴った形而下的な重みを，人間ではなく専制政治を，という飛躍に従属させることによってとどまるところを知らぬ飛躍に歯止めをかける，というものである。Camus がそうしたことに注目していたのは明らかである。

《Garder à la violence son caractère de rupture, de crime—c'est-à-dire ne l'admettre que liée à une responsabilité personnelle. Autrement elle

---

3) ibid. p. 326.

est par ordre, elle est dans l'ordre—ou la loi ou la métaphysique.》<sup>4)</sup>

では一体どのようにして Kaliayev が個人的な責任を取るのかといえば、  
《une vie est payée par une vie》<sup>5)</sup> ことによってである。つまり殺人者にと  
って《le meurtre coïncide avec le suicide》<sup>6)</sup> のである。ここに Kaliayev  
の斬新さがあると思われる。なぜなら Camus 自身が いみじくも記してい  
るように《Aujourd'hui le meurtre par procuration. Personne ne paye》<sup>7)</sup>  
と思われるからである。

## 2. 愛について

この作品は *L'Homme révolté* (1951) と並んで Camus の所謂「反抗の  
系列」に属する作品であり、*L'Homme révolté* において彼が説いた思想の  
エッセンスを端的に表現した戯曲であることは周知の通りである。しかし  
ながらこの作品には＜反抗＞のテーマと密接に結びついていながらも、も  
う一つのテーマ、つまり＜愛＞のテーマが取り上げられている。この作品  
のように愛について単刀直入に書かれたものは他の Camus の作品群に比  
してみると異例なものである。Roger Quilliot もそのことを次のように認  
めている。

《L'amour apparaissait dans *La Peste* quasiment par prétérition.  
Dans *Caligula*, il avait rapidement cessé d'être la cause pour n'être  
bientôt que l'occasion du délire impérial. Dans *Le Malentendu*, les  
scènes d'amour entre Jan et Maria avaient été greffées après coup sur  
la pièce ; mais la portée en restait plus symbolique que directement  
humaine.》<sup>8)</sup>

4) Albert Camus : *Carnets II* (Gallimard) p. 214.

5) *ibid.* p. 199.

6) *ibid.* p. 199.

7) *ibid.* p. 199.

8) Roger Quilliot : *Les Justes* présentation, Pléiade, T, R, N. p. 1823.

ところで、この作品の Kaliayev と Dora との愛の場面は、Camus がこの作品を創り上げるうえで下地とした『テロリスト群像』にはまったく言及されていない部分であり、この場面、つまり第三幕は、この作品中においては Camus 自身の《la seule scène vraiment d'imagination》<sup>9)</sup> と見なしても良いと思われる。そして、その愛について Camus が特に意図しようとしたのは《traiter de l'amour et de ses rapports avec la politique et l'esprit révolutionnaire》<sup>10)</sup> であったように思われる。そして、そこからこの作品が持つ愛の悲劇性も生じてくるように思われる。以下でこうした愛のディマンと悲劇性とを考察してみたい。

まず目につくのは、愛について二つの概念が Kaliayev と Dora の会話によって示されているということである。最初の概念は Kaliayev が言うところの《Nous aimons notre peuple》<sup>11)</sup> というような漠然とした愛である。この愛のために彼はテロルを指向し、自らの生命をも犠牲にするのである。しかしながらそうした愛は一方的なものであり、何も期待することの出来ないものである。Dora はこうした愛のあり方に疑念を抱き Kaliayev に次のように問うのである。《Nous l' (notre peuple) aimons d'un vaste amour sans appui, d'un amour malheureux. Nous vivons loin de lui. (...). Et le peuple, lui, nous aime-t-il? Sait-il que nous l'aimons? Le peuple se tait. Quel silence, quel silence...》<sup>12)</sup>。それに対して Kaliayev はそれこそが愛だと答える。しかし Dora は別の愛のあり方—換言すれば概念—があるのではないかと問う。《À certaines heures, pourtant, je me demande si l'amour n'est pas autre chose, s'il peut cesser d'être un monologue, et s'il n'y a pas une réponse, quelquefois》<sup>13)</sup>。つまり

9) Alain Costes : *Albert Camus ou la parole manquante* (Payot) p. 158.

10) Roger Quilliot : *Les Justes* présentation, Pléiade, T, R, N. p. 351.

11) Albert Camus : *Les Justes* Pléiade, T, R, N. p. 351.

12) *ibid.* p. 351.

13) *ibid.* p. 351.

Dora の求める愛とは、モノローグではなく、そこに実体として存在し、互いに語り合えるか、もしくは答えはなくともその沈黙を通してお互いの存在を確かめ合えるものであろう。Kaliyev と Dora の愛についての概念は相反するものであり、Dora は個人的な相互の愛を指向するのである。彼女の次の言葉がそのことを証明している。《M'aimes-tu dans la solitude, avec égoïsme? M'aimes-tu si j'étais injuste?》<sup>14)</sup>。個人的な恋愛においてはごくありふれた《avec égoïsme》愛が《Tu m'aimes plus que la justice, plus que l'Organisation?》<sup>15)</sup>と問いかけるのは理解されるであろう。そして Kaliyev 自身も明確な返答は避けているものの Dora の問いかけに動かされているのも事実である。しかし Dora にとっては Kaliyev から「正義や組織以上に君を愛している」という言葉を引き出すことが是非とも必要なものであり、そのことのためならいかなるものの犠牲をも辞さないのである<sup>16)</sup>。ところが彼らの置かれている状況が彼らにそうした愛を許さない。なぜなら彼らを待ちうけえいるのは死だから。彼らのディレンマは、博愛から生じる自己の死を伴っているが故に決して成就することのない《avec égoïsme》愛のディレンマだと言えよう。そうしたディレンマの中で Kaliyev は死地に赴く。そして、その中に解決を見出そうとするのである。

《 Dora

Nous ne sommes pas de ce monde, nous sommes des justes. (...)

Ah! pitié pour les justes!

Kaliyev

Oui, c'est là notre part, l'amour est impossible. Mais je tuerais le

14) ibid. p. 352.

15) ibid. p. 352.

16) 《Alors, dis oui, mon chéri, si tu le penses et si cela est vrai. Oui, en face de la justice, devant la misère et peuple enchaîné. Oui, oui, je t'en supplie, malgré l'agonie des enfants, malgré eux qu'on pend et ceux qu'on fouette à mort...》ibid. p. 353.

grand-duc, et il y aura alors une paix, pour toi comme pour moi.

Dora

La paix ! Quand la trouverons-nous ?

Kaliayev

Le lendemain.

》<sup>17)</sup>

彼にとって大公を殺すこと（それは同時に彼自身の死をも意味する）が平和をもたらすであろう，ということを上の会話を通して知ることが出来る。彼にとっては大公を殺し，自らの生命を支払うことによってしか平和はおとずれないのであり，平和がおとずれない限り Dora への個人的な愛もおとずれないのである。大公殺害の後，捕えられた彼は，監獄に彼を訪問しに來た大公妃にそのことを明言する。《Ceux qui s'aiment aujourd'hui doivent mourir ensemble s'ils veulent être réunis.》<sup>18)</sup> さらに彼は彼女に向って次のように言う，《Mais ne peut-on déjà imaginer que deux êtres, renonçant à toute joie, s'aiment dans la douleur sans pouvoir s'assigner d'autre rendez-vous que celui de la douleur ? Ne peut-on imaginer que la même corde unisse alors ces deux êtres ?》<sup>19)</sup>。ところで，ここで注目しても良いと思われるのは，最初この作品は *La Corde* という題名をもっていたということである<sup>20)</sup>。何故 Camus が最初 *La Corde* という題名を用いていたのかは，先きの Kaliayev の台詞によって推察できよう。なによりもまず，この作品においては corde という言葉は死に通じており，そして Kaliayev がこの corde だけが互いに愛し合う者を結びつける唯一の

17) ibid. p. 353-354.

18) ibid. p. 375.

19) ibid. p. 376.

20) Roger Quilliot は，題名の変更の理由を次のように記している。《En février, il achève le premier état de *la Corde* (la pièce devait porter ce nom, mais il y renonça par égard pour les comédiens, et par crainte de l'usage qu'eût pu faire d'un pareil titre une critique malveillante.)》*Les Justes* présentation, Pléiade, T, R, N. p. 1824

方法だと主張することは、愛＝死という相互関係を示すものであろう。Camus はこうした愛のあり方を *La Corde* という題名を用いることによって象徴的に示そうとしたのだと思われる。第5幕において、Dora が Kaliayev が絞首刑に処されたという報告を聞いて《*Sa mort du moins est à moi*》<sup>21)</sup> と叫ぶ場面は、悲惨であると同時に二人の愛のあり方を十分示しているものと言えよう。Kaliayev が死んだ時初めて Dora は彼を個人的に所有することが出来、その上二人の愛を完全に成就させるために今度は Dora が爆弾を投げ、絞首刑に処されることによって Kaliayev と同じ corde に向って身を捧げるのである、《*Tu (Stepan) me la (bombe) donneras, n'est-ce pas? Je la lancerai. Et plus tard, dans une nuit froide ...*》<sup>22)</sup>。Dora が寒い夜に同じ corde で死へ旅立つ時に、人民への愛も、Dora 個人として Kaliayev 個人への愛も成就することになるだろう。死こそが彼らの矛盾もディレンマも解決してくれるだろう。しかしながら、その解決こそが愛する者同志にとっては悲劇的なのである。したがって《*la possibilité pour Dora et Kaliayev d'un amour normal, chargé de tendresse et d'égoïsme*》<sup>23)</sup> は悲劇的にならざるを得ないけれども、そこにはお互いの深い信頼の上に立脚して初めて成立する一つの愛の可能性が示されていることも事実であろう。

### 3, Kaliayev 対 Stepan

この作品を構成している人物たちは、大きく分けてつのグループに分類できると思われる。彼らは全員＜戦闘団＞に属し、革命を志向しているテロリストたちであるが、そうした彼らにおいても分類が可能である。その一方を Kaliayev, Dora, Annenkov, Voinov が代表し、もう一方を Stepan が代表していると考えられる。彼らが同じ目的を持ち、同じ手段を用いる

21) Albert Camus : *Les Justes* Pléiade, T, R, N. p. 393.

22) *ibid.* p. 393.

23) Roger Quilliot : *Les Justes* présentation, Pléiade, T, R, N. p. 1823



にしても彼らの差違は決定的である。そうした彼らの差違を分析していくことによって Kaliyev, つまり Camus<sup>24)</sup> が正義に対して抱いている観念を知ることが出来るように思われる。

まずこの作品においては Kaliyev たちと Stepan を区別する重要なキー・ワードがある。それは《limites》という言葉である。この《limites》をめぐる二つの立場の違いを明確に示している場面がある。それは第2幕において Kaliyev が爆弾を投じるために Serge 大公を待っている時に、馬車が大公と大公妃と一緒に二人の子供を乗せて彼の前を通りかかるが、彼が子供の姿を見たために爆弾を投げなかった場面である。この Kaliyev の行動は一つの限界を示す最も顕著な場面であろう。その限界とはたとえ彼が生相殺の理論を楯にテロルをおこなおうとも無差別にテロルはおこなえない、ということである。しかしながらこうした Kaliyev の行動を Stepan は激しくなじる。なぜなら彼にとっては《Il n'y a pas de limites》<sup>25)</sup> だからである。ここで一寸、興味ある人物 Stepan にスポットを当ててみたい。この *Les Justes* は『テロリスト群像』からそのプロットを借り受けていることは前にも記した通りであり、Kaliyev も Dora も実名で登場させられているが Stepan に限って言えば、Camus の創作した人物である。この Stepan を想起させる人物を *Carnets* の中に求めるならば、《Détruire, détruire. Un réaliste. Il faut entrer à l'Okhrana.》<sup>26)</sup> と記されている un réaliste ということになろう。しかしもっと良く Stepan の原型を示しているものとして、*L'Homme révolté* 中の *Trois possédés* と題された章の中で見出せるネチャーエフであろう。彼はドストエフスキーの『悪霊』（仏題 *Les Possédés*）中のピョートル・ヴェルホーヴェンスキイのモデル

24) 《Plus que tout autre personnage de Camus, peut-être, le Kaliyev des *Justes* sera le porte-parole de son auteur.》Ilona Coombs : *Camus, homme de théâtre* (Nizet) p. 117.

25) Albert Camus : *Les Justes* Pléiade, T, R, N. p. 338.

26) Albert Camus : *Carnets II* p. 204.

となった人物として有名であるが、彼は非常に Stepan 的人物を理想像とするような、一般的には＜革命家の教義問答＞と呼ばれているパンフレットを残している。そのパンフレットに記されている教義を Stepan の台詞と対照してみると、非常に興味ある一致が得られる。その教義には次のように記されている。「1, どんな激しい感情が沸き起ころうとも、それは革命というただひとつの目的に向けられる。彼（革命家）はこのために、自己の利益、愛情、恋愛を犠牲にする。（…）到達せられるべき目標だけが彼にかかわる一切である。道徳の概念は有効性のそれにとってかえられる。言い換えると革命の勝利に貢献しうるものはすべて道徳的であり、革命にとって害となるものはすべて道徳的でない。（…）3, 革命家は至る所に浸透すべきである。小売商店、教会、（…）第三課（ロシア皇帝直属の秘密警察）、冬宮の中に到るまで。4, （…）革命とは、ただただ破壊的なものである」<sup>27)</sup>。以上の教義に Stepan の台詞を照応させてみると、1の教義に照応するように次のように語る、《Rien n'est défendu de ce qui peut servir notre cause. (...) Vous vous reconnaitriez tous les droits》<sup>28)</sup>。3の教義に照応する場合として、Annenkov が警察にもぐって二重スパイをしても良いのか、と問うのに対して《Oui, s'il fallait》<sup>29)</sup>と答えている。さらに4の教義に対しては《Détruire, c'est ce qu'il faut. (...) il faut ruiner ce monde de fond en comble》<sup>30)</sup>と言っている。以上のような対比は強引なものと言えるかもしれないが、ネチャーエフと Stepan が共に有する或る類似性を示していることもまちがいないように思われる。その類似性は教義にも記されているように、道徳の概念は有効性のそれにとってかえられる、ということに要約できよう。したがって、このような精神世界に生きる Stepan が、大公の馬車に2人の子供が乗っていたばかりに投弾を中止

27) ルナ・カナック著：『ネチャーエフ』佐々木孝次郎訳 現代思潮社 p. 53-57

28) Albert Camus : *Les Justes* Pléiade, T, R, N. p. 337.

29) *ibid.* p. 355.

30) *ibid.* p. 355.

した Kaliayev をなじるのは当然なことであろう。なぜなら 《Parce que Yanek n'a pas tué ces denx-là, des milliers d'enfants russes mourront de faim pendant des années encore.》<sup>31)</sup> からである。Stepan にとっては、何の罪もない子供を殺すということが問題ではなく、2人の子供対数千の子供という確率論的な事実が問題となり、すなわち有効性の問題にすべてが集約されるのである。ここに Stepan と Kaliayev の対立の根元があると思われる。Kaliayev は子供が乗っている馬車に爆弾を投げなかった。なぜなら 《tuer des enfants est contraire à l'honneur》<sup>32)</sup> からである。名誉に反するということは、有効性だけの問題を超えて人間の精神性にかかわってくることを意味していると言えよう。彼にとっては何よりもまず 《la fin de la révolution est affirmée en tant que valeur de l'esprit.》<sup>33)</sup> ことが必要なのである。彼にとって名誉は 《si un jour, moi vivant, la révolution devait se séparer de l'honneur, je m'en détournerais.》<sup>34)</sup> ほど決定的なものである。ところで、こうした名誉というような価値を、Kaliayev が提出するのはそれなりの理由があるのであるが、その理由を記す前に（その理由とも密接に結びついているのだが）差し当っては Kaliayev と Stepan にとっての革命という目的自体に対する違いを両者の台詞によって示してみたい。Kaliayev は革命に身を投じた理由を述べている、《J'aime la vie. Je ne m'ennuie pas. Je suis entré dans la révolution parce que j'aime la vie》<sup>35)</sup>。それに対して Stepan は 《Je n'aime pas la vie, mais la justice qui est au-dessus de la vie.》<sup>36)</sup> と答える。そして Kaliayev は革命と人生の関事について次のように説明している、《la vie

31) *ibid.* p. 337.

32) *ibid.* p. 340.

33) Pierre-Henri Simon : *Présence de Camus* (La Renaissance du Livre) p. 88.

34) Albert Camus : *Les Justes* Pléiade, T, R, N. p. 340.

35) *ibid.* p. 320.

36) *ibid.* p. 320.

continue de me paraître merveilleuse. J'aime la beauté, le bonheur ! C'est pour cela que je hais le despotisme. (...) La révolution, bien sûr ! Mais la révolution pour la vie, pour donner une chance à la vie.》<sup>37)</sup>。つまり革命と人生とは常に同一線上に存在するものだというこ  
とである。それに対して Stepan の理論は、まず第一に革命が存在し、そ  
れに付随するかたちで人生が定義づけられるものである。つまり彼にとっ  
ては人生＝生命そのもののさえもが有効性の価値基準としてしか見なされて  
いないということである。彼にとっては正義＝革命なのであるから、革命  
を遅らせてしまうような Kaliyev の態度は反対に正義に反するものなの  
である。つづいて両者の正義に対して抱く観念の違いを示してみようと思  
うが、それには直接作品に従って読み進んでいくほうがよりはっきり理解  
されると思われる。第2幕において、Stepan と Dora が Kaliyev の子  
供を武さなかった態度について口論している。Stepan は Kaliyev が子  
供を殺さなかったのは革命を遅らせることになり、結局は真に革命を信じ  
ていないことになる、と言う。それを聞いてそれまで黙っていた Kaliyev  
が急に反論する。以下は次のとおりである。

《 Kaliyev

Stepan, j'ai honte de moi et pourtant je ne te laisserai pas continuer. J'ai accepté de tuer pour renverser le despotisme. Mais derrière ce que tu dis, je vois s'annoncer un despotisme qui, s'il s'installe jamais, fera de moi un assassin alors que j'essaie d'être un justicier.

Stepan

Qu'importe que tu ne sois pas un justicier, si juste est faite, même par des assassins. Toi et moi, ne sommes rien.

Kaliyev

Nous sommes quelque chose et tu le sais bien puisque c'est au

---

37) ibid. p. 322.

nom de ton orgueil que tu parles encore aujourd'hui.

Stepan

Mon orgueil ne regarde que moi. Mais l'orgueil des hommes, leur révolte, l'injustice où ils vivent, cela, c'est notre affaire à tous.

Kaliayev

Les hommes ne vivent pas que de justice.

Stepan

Quand on leur vole le pain, de quoi vivraient-ils donc, sinon de justice ?

Kaliayev

De justice et d'innocence.

Stepan

L'innocence ? Je la connais peut-être. Mais j'ai choisi de l'ignorer et de la faire ignorer à des milliers d'hommes pour qu'elle prenne un jour un sens plus grand.

Kaliayev

Il faut être bien sûr que ce jour arrive pour nier tout ce qui fait qu'un homme consente à vivre.

Stepan

J'en suis sûr.

Kaliayev

Tu ne peut pas l'être. Pour savoir qui, de toi ou de moi, a raison, il faudra peut-être le sacrifice de trois générations, plusieurs guerres, de terribles révolutions. Quand cette pluie de sang aura séché sur la terre, toi et moi serons mêlés depuis longtemps à la poussière.

Stepan

D'autres viendront alors, et je les salue comme mes frères.

Kaliayev

D'autres ... Oui ! Mais moi, j'aime ceux qui vivent aujourd'hui sur la même terre que moi, et c'est eux qui je salue. C'est pour eux que je lutte et que je consens à mourir. Et pour une cité lointaine, dont je ne suis pas sûr, je n'irai pas frapper le visage de mes frères. Je n'irai pas ajouter à l'injustice vivante pour une justice morte.》<sup>38)</sup>

以上の引用が明確に両者の正義に対しての態度を示しているように思われる。Kaliayev にとってはなによりもまず「人生を愛すること、それは人間を愛し、尊重することであり、たとえ人間の未来の幸福という口実であろうと、人間の殺戮を回避する」<sup>39)</sup> ことが重要なのである。そして Stepan 的思考に反対するのは Kaliayev 以上に Camus 自身の気質であるように思われる。彼は *Carnets* の中で、《je ne puis pas déporter des millions de personnes et supprimer toute liberté pour un résultat quantitatif équivalent et supputer pour trois ou quatre générations préalablement sacrifiées,》<sup>40)</sup> と記している。彼のこのような気質が *Les Justes* と同じ時期に準備され、*Les Justes* の解説書とも読める *L'Homme révolté* を書かしたとしても不思議はないと思われる。彼はこの大著において歴史的必然性の名において、多大の犠牲を認め、またソビエトで実際におこなわれているような血の粛清や強制収容を容認している共産主義を徹底的に批判している。彼にとって共産主義とは、歴史的必然性という唯一の正義を楯として人間の自由、もしくは生命さえも抑圧するものと考えられていた。彼が共産主義に与えたこうした公式は先きの Kaliayev と Stepan の会話の中で Stepan に見出されるものと同種類のものだと言えよう。しかし Camus にとっては《Il n'y a pas justice, il n'a que des limites.》<sup>41)</sup> と記しているように絶対的正義は存在しない。次に limites と

38) ibid. p. 338-339.

39) ジャン・オニムス著：『カミュ』 鈴木・浜崎訳 ヨルダン社 p. 95.

40) Albert Camus : *Carnets II* p. 183.

41) ibid. p. 235.

いう概念を通して Kaliayev の態度を考察してみたい。この作品で彼は大きく言って二つの limites に直面する。一つは、人間は人間を殺すことは出来ないという limite である。しかしこの limite は結局は踏み超えられてしまうものである。だが本質的には認められないということを証明するために、進んで自ら死に赴く。そうすることによって彼は Stepan との決定的な訣別を意図しようとするのである。《Il (meurtre) est insolite et ne peut donc être utilisé, ni systématique, comme le veut l'attitude purement historique. Il est la limite qu'on ne peut atteindre qu'une fois et après laquelle il faut mourir. Le révolté n'a qu'une manière de se réconcilier avec son acte meurtrier s'il s'y est laissé porter : accepter sa propre mort et le sacrifice. Il tue et meurt pour qu'il soit clair que le meurtre est impossible. Il montre alors qu'il préfère en réalité le Nous sommes au Nous serons.》<sup>42)</sup> つまり Kaliayev は自ら死ぬことによって Nous sommes であることを示し、Stepan 的な Nous serons を認めないのである。Stepan 的な Nous serons を導くような絶対的正義は存在せず、《Tuer pour la justice, et mourir pour se purifier d'avoir tué》<sup>43)</sup> によって limites を守りながら正義を示していく態度があるばかりである。つまり彼にとって重要なのは「何らかの正義を抱くことではなく、みずから正義の人となること」<sup>44)</sup> なのであるように思われる。ここまでくれば何故 Camus がこの作品に *Les Justes* という題名を与えたのか理解されよう。このように正義を体現していくためには、子供を殺すということは許されない。ここにもう一つの limite が存在し、この limite を破ることは《contraire à l'honneur》ことになり絶対に許されない。ここにおいて何故 Kaliayev が名誉というものに固執するのか理解されよ

42) Albert Camus : *L'Homme révolté* (Bibliothèque de la Pléiade, Essais. Gallimard, 1972. 以下 Pléiade, Essais. と略す). p. 685-685.

43) Pierre-Henri Simon : *Présence de Camus* p. 92.

44) 西永良成著：『評伝アルベール・カミュ』白水社 p. 167.

う。つまり正義を具現することは人間の名誉を守ることでもある。したがって、目的（革命）と手段（人間を殺したり、子供を殺したりすること）という問題に対して Kaliyev が選ぶのは、目的は手段を正当化し得ないということである。なぜなら《Une révolution qu'on sépare de l'honneur trahit ses origines qui sont du règne de l'honneur.》<sup>45)</sup> ことになるからである。では一体 Kaliyev は何を創りだそうとするのであろうか？ 彼が創りだそうとするのは、Stepan のような幾世代後の絶対的正義を標榜するような至福千年の王国でないことは明らかである。彼が創りだそうとするのは、現世において、まさに目的と手段が正義という名の行為によって結びつけられて生じる「かりそめの道徳」<sup>46)</sup> とでも呼べるものであろう。このようなかりそめの道徳は、革命という目標に達するために、Stepan が指向するように目的が手段を正当化させ、名誉から離れてしまうような場合には、その目的に対して立ち上るものであろう。したがって、Kaliyev 的人物と Stepan 的人物がいつの日にか互いに戦わねばなるまいと思われるのは、至極当然なことであろう。

## 結 語

以上述べてきたように Camus の描く Kaliyev 的対の生の相対性の構図は輝くばかりの光彩を放っているが、それはあまりに古典的な縮図、つまり決闘などに見られる完全に対になった個人を前提としている。しかし現代においては、個人対個人の生の相対的立置関係は、組織対組織—たとえば国家対国家という個人を根底に置かない機構にとって代わられていると考えてもよからう。そこにおいては大量殺戮—たとえば核の使用—にみられるむに組織が唯一の価値概念として指定されている。その組織を支えているイデオロギーは、自由主義であれ、ファシズムであれ、共産主義であれ抽象的な価値概念である。こうした個人が抽象的な価値概念に圧しつ

45) Albert Camus : *L'Homme révolté* Pléiade, Essais. p. 695.

46) ジャン・オニミュス著：『カミュ』 p. 128.



ぶされるプロセスを Camus は *L'Homme révolté* において鋭くあばきたてており、たとえ個人が抽象的な価値概念に圧しつぶされるのが一時的、過渡的なものであっても個人の生の尊厳は守られねばならない、というのが彼の主張であった。こうした考えに立つ彼が、Maurice Merleau-Ponty の *Essai sur le problème communiste* という副題をもつ *Humanisme et terreur* (1947) に憤慨した<sup>47)</sup>のは当然であろう。その著作を一言で言えば、ソビエト連邦の強制収容所の存在や、血の粛清などの冷酷な政策を革命途上の一つのプロセスと見なすことによって、ソビエト、しいては共産主義を擁護するものである。Merleau-Ponty の立脚する立場は、ソビエトを自由諸国との対比の中で位置づけるものである。つまり自由主義体制は植民地や軍事的弾圧の上に成り立っているということを一方の極に置いたうえで、ソビエトの共産主義や政策を問題とするのである。そのような立場から彼は、*《Un régime nominalelement libéral peut être réellement oppressif. Un régime qui assume sa violence pourrait renfermer plus d'humanité vraie.》*<sup>48)</sup>と述べるのであるが、しかし Camus が問題とするのは、どちらの体制により多くの *humanité* が存在するかではなく、暴力 = *violence* そのものである。たとえ共産主義により多くの *humanité* が存在しようとも、現在を生きる人々にとっての暴力そのものが問題なのである。カフカは『審判』の中で、不条理な社会機構の中で人間性を奮われ、理由も解明できぬままに犬のように殺されていく ヨーゼフ・K を描いたが、それはないよりも冷徹で非情な国家という象徴と受けとってよいだろう。組織にとって価値の無い人間は抹殺されていく。組織を唯一の絶対的価値として人間を見るなら、それは当然であろうし、有効なことであろう。しかし Camus にとって唯一の価値は、*Le Mythe de Sisyphe* 以来述べているように、人間が生きる、ということである。したがって彼の唯一の価値、つまり生きることを妨げるものに対しては戦わねばならない。しかし、

47) Jean-Paul Sartre : *Situations IV* (Gallimard) 参照

48) M. Merleau-Ponty : *Humanisme et terreur* (Gallimard) p. 10.

その戦いの中にも一定の限界が存在することを示さねばならない。もし限界が存在しなければ、再び生きることを否定してしまう状態を許してしまうことにもなりかねないからである。ところで Camus は、そうした限界を伴った反抗を生み出すに至る根源的な原理を次のように記している。

《Là où l'esclave se révolte contre le maître, il y a un homme dressé contre un autre, sur la terre cruelle, loin du ciel des principes. Le résultat est seulement le meurtre d'un homme. Les émeutes serviles, les jacqueries, les querres des queux, les révoltes des rustauds, mettent en avant un principe d'équivalence, vie contre vie, que, malgré toutes les audaces et toutes mystifications, on retrouvera toujours dans les formes les plus pures de l'esprit révolutionnaire, le terrorisme russe de 1905, par exemple.》<sup>49)</sup>

この *Les Justes* は粉れもなく les formes les pures de l'esprit révolutionnaire, le terrorisme russe de 1905 を具現している人々を主人公とした作品である。Camus がなによりもまず彼らに依託しようとしたのは、この un principe d'équivalence, vie contre vie であったように思われる。そして現代においてそのような原理をもって相手に立ち向かうということは、《Pour finir, revaloriser le meurtre pour l'opposer à la destruction anonyme et froide, et abstraite.》<sup>50)</sup> になるだろう。彼はこうした問題を非常に強く訴えたい気持ちに駆られたに違いあるまい。そして彼の意図は或る程度成功したと言っても過言ではあるまい。なぜなら、「おそらくこうした潔癖なテロリストたちの例は、集団的殺人と政治的犯罪に慣れてしまいはじめた時代にあっては、いまだに人の心にはっきりと訴えるものをもっているだろう」<sup>51)</sup> と思われるからであり、また実際に多くの人たちに訴える力があつたことを証明するためには、この作品が大成功を収め、長期

49) Albert Camus : *L'Homme révolté* Pléiade, Essais. p. 518.

50) Albert Camus : *Carnets II* p. 275.

51) アデル・キング：『カミュ論』 大久保敏夫訳 清水弘文堂 p. 72.

公演を続けた<sup>52)</sup>ということを指摘するだけで十分かと思われるからである。

---

52) «il semble qu'à tout prendre Paris apprécia *Les Justes* puisque, comme *Caligula*, ils eurent plus de 100 représentations.» Ilona Coombs : *Camus, homme de théâtre* p. 126.